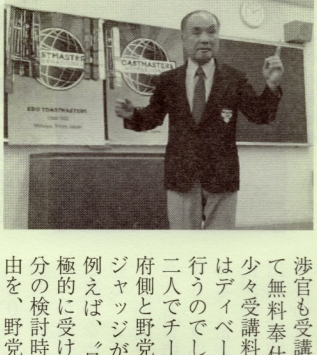
一人一語

明治以来、私達は英語を通じて西洋文化、文明を輸入してきました。一方、古くは列強との不平等条約、近くは日米通商摩擦の如く、英語での交渉失敗も重ねてきました。私も現役の頃は海外のプロジェクトファイナンスを担当して英語でのネゴで苦労をしました。反省しきりです。今はITの進化で何時でも、何処でも海外ニュース番組が見られる環境です。英語勉強は紙ベースよりネットで視聴する方が効果的。英語を理解すれば視点もグローバル化し、英米文化の理解も楽しみも深まります。

私の引退後の時間も多様化しています。そんな折、元外交官の学友からNPOの社団法人、英語交流連盟の常務理事のボランティアを要請されました。連盟の目的は世の中にディベート教育を普及して若者に説得力のある英語スピーチと交渉力を養って貰おうとするものです。〝若い頃に荒稼ぎした者は引退後は教育に意を注ぐものだ〟とは興銀先輩の至言ですが、私は例外で後半のみに該当します。連盟では全国大学ディベート大会を開催しており、毎年32校が競っています。昔はICU、慶応、上智が、近年は早稲田、東大、一橋も上位で健闘しています。大会では英国からの優勝チームを招いて本場のモデルも見せています。社会人向けの全国大会も開催しており人気があります。最近では高校生レベルでの全国大会にまで広がりを見せています。私が主宰する勉強会でも中高一貫校の英語の先生方が受持ちのディベート授業の為に練習しています。又、若手官僚の教育プログラムにも取り入れられて　政策研究大学院で財務、外務、経産省等の現役にもディベートの講座を持っています。TPPの交渉官も受講生でした。他はすべて無料奉仕ですがここだけは少々受講料を頂いています。ではディベートは具体的にはどう行うのでしょうか？典型的には二人でチームを組み、くじで政府側と野党側を決めます。次にジャッジが演題を発表します。例えば、〝日本は中東難民を積極的に受け入れるべし〟と。20分の検討時間後に政府が提案理由を、野党が反対理由を各人が各8分以内で英語で述べます。政府からは人道的見地、先進国の義務、労働力不足の補充等が、一方野党からは受入れ費用負担の問題、治安悪化、均一文化の乱れ等の反論が出ると予想されます。そもそもこれらの説得力のある論点を見出すのが最初の仕事です。次にその論点を補強する身近な具体例を考えます。例えば、反対側ならベルギー等の治安悪化を話すと効果的でしょう。次に相手の論点への反論を考えます。それらを英語でスピーチに纏めるのが、最後の仕事です。全員のプレゼン終了後にジャッジまたは聴衆の多数決で勝ち負けを決めます。個人的見解ではなく説得力の優劣が決め手です。論題が出されてから短時間で論旨をまとめる即興型のスピーチですので、事前に用意したスピーチを競うトーストマスターとは異なります。尚、最近は主要大学にはESSの他にディベート部が公認されています。学生の大会では〝同性婚を認めるべし〟といった論題はもう陳腐で議論になりません。LGBTの存在や同性婚は選択の自由を認める社会では当然で反論が難しいとの理由です。若者達の自由の権利意識の高まりには驚かされます。自然保護、選択の自由、格差是正、弱者保護等の理由付けをした議論が若者には評価される時代になっています。ご興味の方は〝英語交流連盟〟でPC検索して下さい。

英語ディベートって何だ？



鈴木　茂男（41年）